私の大学時代と今

河隅健一

時のたつのは早いもので、市大を卒業して二〇年以上が過ぎ、私もそろそろ中年の域に達しつつある。

そもそも大阪には縁もゆかりもない私が市大を選んだのは、「史学地理学科がある」の一言につきる。勉強嫌いだった私が唯一好きだったのが地理で、それを目安に大学を選んだら、たまたま大阪市大に行き着いたのである。

当時から管理教育・温室教育で名高かった愛知県から、突然自由放任の大阪の地に足を踏み入れたのだから、私にとってのカルチャーショックは大きかった。まず言葉の問題。一語一語のアクセントの違いや通じない言葉の連続に戸惑った。大学生活は始まったものの、学生運動が最後の残り火を燃やしていた頃のこと、入学式もなく、いつから講義が始まるかもわからない日々が続いた。ようやく開始された講義も時としてアジ演説に代わり、テストの前になると繰り返されるバリ封。クラスメイトの一部はヘルメットをかぶり、騒然とするキャンパスの中、私のようなノンポリ学生は怠惰な毎日を漫然と過ごすしかなかった。

また、私の学生時代はちょうど第一次オイルショックにぶつかり、下宿生活にようやく慣れ始めた貧乏学生にはひときわこたえた。学校帰りにスーパーに寄って、食料や日用品を買う生活に「モノ不足」や「狂乱物価」が直撃し、「ヒマはあるがカネとモノがない」状況が卒業まで続いた。省エネのため、NHKが昼下がりの放送を休止したり、町中のネオンが消されたり、あげくは大学でのテスト用紙までもが不足したりしたことも記憶している。

さらに、私の大学生活を語る上で欠かせないのが趣味の鉄道旅行だ。地理学を選んだ理由自体が、「鉄道が好き」という単純かつ不純な動機から来ているのだから、同じ教室のO君とともに鉄道同好会には一応籍を置いた。ところが、所詮は独善的性格の強いマニアの世界のこと、各自勝手に自分の世界に浸っていたのだから、同好会としての活動より単独で楽しむことの方が圧倒的に多かった。

私の場合はヒマさえあれば北海道から九州まで、全国をひたすら乗りつぶすことだけに燃えていた。その中でもひときわ印象深いのが、初秋に訪れた北海道旅行である。二週間近くの行程のうち、まず青函連絡船にたどり着くまでに二日、道内では半分以上が夜行列車の堅い座席でうたた寝という強行軍であった。今日本地図を広げてみると、その時乗った多くの鉄道路線はすさまじい勢いでめくられ、枝をすべて切り払われてかろうじて幹だけを残している老木の感がある。寂しい限りである。

勉学以外のことばかりが主役だった私の大学生活だが、教養部の二年で多くの友に恵まれ、その友や周辺の善意に満ちた人々から、人間としての生き方・考え方を学ぶことができた。地元で親元から通学していたら決して学べなかったことを、この生活で吸収できたことは言うまでもない。

落ち着きのない教養部と違い、専門部は学問の府の雰囲気があふれ、私も気持ちを入れ替えて講義に臨んだ。特に演習や特講などの少人数の講義には快い緊張感を味わい、慣れない実習に未知の世界

をかいま見た気がしたものだ。この時期になると、進路の選択が大きな課題として迫ってきた。周りの仲間を見ると、やはり教員志望が多い。何になるのかはっきりしないまま過ごしてきた自分の、モヤモヤとした気持ちを一転させてくれたのが教育実習だった。要領の悪い私は教育実習の申し込みが遅れ、母校ではない職業高校に、普通教科では初めての実習生として大変お世話になった。その時の体験が教員の道を志す強い動機となり、それから採用試験の学習に打ち込んだ。一日中大学の図書館に缶詰になり、おかげで無事採用試験を通過、愛知県での教員生活に励んでいる。

教員生活の第一歩は定時制高校、続いて職業高校と、なかなか地理学教室で学んだことを生かし切れなかった。転勤した普通科高校でやっと知識を生かせると思った頃には、大学を卒業してからすでに十二年の月日が流れていた。さらに愛知の場合、普通科高校はどこも進学実績がすべてであり、社会科の中心は受験に使える日本史・世界史に偏重していた。曲がりなりにも地理を使うのは理系センター利用の生徒のみという学校が、今でも大多数を占めている。また、大学側も受験科目から地理をはずす傾向が強いので、中堅から下位に位置づけられる進学校に勤務する私は、文系の生徒には「地理を取ると受験校の選択幅が狭まるぞ。だから日世にしておけ。」不本意ながらそんな指導をせざるを得ないのが現状である。さらに、カリキュラム自体に地理が存在しないこともしばしばである。従って「何でも担当する地理教師」にならざるを得ず、ここ何年も「専門は日本史」の状態が続いている。今年は久しぶりに文系で地理Aを担当しているものの、生徒達の基礎力低下は目を覆いたくなる状態で、都道府県名や国名などの小学校レベルから授業を展開している。聞けば私の高校に限ったことではなさそうだし、大学で学んだ専門知識が生かせない、自分に続く地理好きが現れない、つくらせてもらえない現状を歯がゆく思っている。

また、何度も三年生を担当しているのに、いまだに母校へ教え子を送り込めないことも残念に思っている。ただ、大学へ行く意義や楽しさは機会があるたびに生徒達に伝えており、「おかげで大学へ行く気になった」という声も毎年聞いている。

薄れゆく大学時代の記憶の中、卒業してから何度か大阪を訪れてはいるものの、実際キャンパスへ行ったのは一度しかない。考えてみれば我が家の長女も来年は受験に突き当たる。一度はともに母校を訪れ、父としての経験や思い出を話してやろうかなと思っている。今、私は心優しい妻と、まだまだ手のかかる三人の子供、健康な父母に囲まれた家庭を持ち、平穏な日々を過ごしている。こんな毎日を過ごせるのも、今の自分に欠かせない経験をさせてくれた大学や地理学教室のおかげであるのは言うまでもない。遅きに失した感はあるが、改めて感謝したい。

大阪市立大学文学部地理学教室創設五十周年を、遠く離れた田舎から心よりお祝いして、拙文を閉じることにする。

（昭和52年卒業）